

移動VR空間による乗り物の概念を壊す自動走行

連絡先 | TEL0776-61-3942 メール seisaku@town.eiheiji.fukui.jp

経済産業省と国土交通省が行うラストマイル自動走行の実証地として、永平寺町は産業技術総合研究所や県と連携しながら実用化に向けた努力を重ねている。ハード技術の進歩を競い合ってきた感があるが、実用化に向けて「自動走行によって人々の暮らしがどう変わるのか」、というソフト面と向き合う時期にきている。自動走行の範囲はあまりに広いため、観光分野に絞り込んだ提案としたい。

1 自動走行車の「車」をなくす

車でなければ、何であるのか。結論を言えば、移動する「空間」である。車両と運転手にまつわる法律も規制も制度もあまりに多く、すべてに整合性をもって改正していくには時間がかかる。また、一般車両と自動走行車両が混在する社会に、同じ法律を当てはめるには困難がある。

移動する空間、という新しい概念と技術に合わせた新しい法整備が必要となるが、技術の進歩と社会変容のスピードに既存の法は追いつかず、むしろ現代社会に合わせて法を立ち上げる方が早いのではないか。

2 「乗る」から「入る」へ

法律を横に置いて考えたとき、自動走行では運転手は不要であり、車内の人は寝ていても、映画を見ていても、食事を楽しんでもいい。自動走行をつかった移動サービスとは、目的地までをいかに快適に、楽しく過ごせるかを競うことになる。乗り物に「乗る」という感覚ではなく、コンテンツの詰まった箱に「入る」という感覚になるのではないか。

であるとすれば、永平寺町も移動する箱について考えなければならない。町名が示すとおり、当町には曹洞宗の大本山永平寺という年間 50 万人を引きつける拠点がある。大本山永平寺の魅力とは、七堂伽藍のすばらしさにあるのではなく、禅の精神と文化、ステイブ・ジョブズが感銘を受けたような世界観、にあると思う。

しかしながら、禅の世界観は容易に目で見えるものではない。遠路、永平寺町にお越しいただきながら、本当に見るべきものを提供できていないのではないかと感じる。大本山永平寺までの移動中に、VR空間という移動する箱の中で、禅というものに理解を深めてもらい、到着と同時に本物の禅の世界を体感してもらう仕組みを、5Gで実現できないだろうか。

3 5Gによる移動VR空間の実現

室内カメラで乗客を識別し、自動的に最適な(言語や表現)映像を流す。大容量のVR映像データを多数用意しクラウドから引っ張ってくることになるが、この大容量通信には5Gが必要である。

5Gは電波の有効距離が短く、移動する対象には不向きであるとも言われる。当町でも実証を重ねているが、自動走行が社会実装されるには5Gの通信能力(同時多接続、低遅延)が必要である。自動走行と移動空間という2つの社会実装を永平寺町で行いたい。

4 移動空間を超えての波及

参拝からの帰路はさまざまなPV映像を流し、他のスポットへの立ち寄りや特産品の購入につなげていく。交通系ICカード等により乗車・食事・買い物・体験のキャッシュレスを達成するとともに、移動と利用の情報分析から観光需要を先読みし円滑なサービスの提供と機会損失の防止を可能とする。AIとビックデータの分野も重要であるが、クラウドとのやり取りをリアルタイムに多数の人間を相手に行うには、5Gの通信能力が必要になる。

VR空間の移動範囲は5Gがカバーしているエリアでもあり、5Gによる無料通信エリアとすることができる。仮に数千人が一度にアクセスを行っても、ストレスなく端末の使用が可能とであり、観光客が8K動画をを使って世界に永平寺の魅力をリアルタイムに発信することも可能となる。

おわりに 5Gの観光に与える影響

5Gは360°映像による仮想旅行を可能にし、観光業の衰退を招くかもしれない。だからこそ現地でしか体感できない世界観や空気感、いわゆるコト消費に力を入れ、そのコンテンツに5Gの技術を活用できることが望ましい。